

2002年度

# トラークル協会会報

第8号

2003年 3月

トラークル協会

〒271-8587 千葉県松戸市栄町西 2-870-1 日本大学松戸歯学部独語研究室気付

Tel. Fax 047-360-9308

## 2002年度春季研究発表会 レジュメ・質疑応答

### ホーフマンスタールの色彩と 詩の Ort についての試論 —トラークルの対比のために— 両角 正司

トラークルの詩と、その一世代前の詩人たちゲオルゲ、ホーフマンスタール、リルケの作品と比較し、その対照の持つ意味及び可能性を探る。具体的には対比に適切な詩人として『青い紫陽花(Blaue Hortensie)』(1906)のリルケにも興味が惹かれるが『美しい日々の思い出(Erinnerung schöner Tage)』(1907)の中の色彩と光、そして『帰国者の手紙(Die Briefe des Zurückgekehrten)』(1907)の中でゴッホ論と一種の色彩論を発表したホーフマンスタールが相応しい。19世紀末から第一次大戦までの両者の叙情詩や散文作品の中に表れる nüanciertされた色彩、その豊かさ、それらによって形成されたイメージの美しさと意味範囲は「現実の外界の色彩とは何の関係もない事物に対する何らかの色彩の名称」に至るまでの検証によって開けて来ると思われるが、本論では対象となるトラークルとホーフマンスタールのうち、後者の〈色〉についての想念を『帰国者の手紙』第4、第5に従って検討し、その後、両者の「青、碧」について対比し、両詩人の Ortについても考察したい。

しかし両者が直接接触した痕跡はない。考えられる接点はトラークルの読書体験乃至彼の蔵書にあり、1911年から12年にかけて長い間所持していたドストエフスキーやその他の Lieblingsbücher の売却リストの中にリルケの『Neue Gedichte』やホーフマンスタールの『Elektra』及び『Theater in Versen』があったとの報告 <O.Basil>があるが、ホーフマンスタール受容として W.Muschg が具体的に挙げているのは、戯曲『Das Bergwerk zu Falun』と詩『Die Beiden』の二作品だけで、戦争に起因するトラークルの夭折のため当然のことながら、ホーフマンスタールの初期の作品しか知り得なかったとしている。両者の人生の軌跡を重ねれば、トラークルがホーフマンスタール文学に接するのは初期から1910年前後までと限定できる。色彩乃至絵画に関してこの期のホーフマンスタールの作品中注目すべきは、5通からなる書簡形式の散文『Die Briefe des Zurückgekehrten』であり、特にその中で der vierte Juni bis Augst 1907 in 『Morgen』はゴッホの絵を通じての当時のヨーロッパ文明批判であり der fünfte Februar 1908 in 『Kunst und Künstler』は色彩そのものを外界認識の核に据えた詩人の世界把握を述べたものである。

「第4」の手紙の内容を素描する。18年振りにドイツに帰国したある男が、自分では制御不能の精神的不快から嘔吐感に襲われる。彼の陥った心理的状况を要約すると、19世紀末、世紀転換期当時のヨーロッパの代表的な爛熟、華やかさとは裏腹に社会を覆っている不透明感に苛立ち、トラークルが視た Verfallの様相の影に怯えて、当時のヨーロッパ社会の退廃に対して嫌悪と反発を抱いたものだった。それは社会が経済性、利便性、利潤等を飽くことなく追求し、それそのものを最大の目的化したため、事物との交感を通じて

のLebenの確信を得るに至らず、全てにおいてLebenの意義が曖昧になってしまった、というのである。最悪の心理状態にあるのに、会社の命運が係り、彼自身の生涯をも決する重要な会議の一時間を前にした彼は、偶然ゴッホの絵画と運命的に出会うことになる。彼の危機的状況を一転させるゴッホの絵とは、樹木の一本一本、黄や緑がかかった畑の畝の一筋一筋、生垣、岩の丘に刻み抜かれた切通し、それらのどれもがひとつのWesenであり錫の壺、陶器の皿、不格好な椅子、どのひとつもWesenならざるはない。これらの創造物のいずれもが世界に対する恐ろしいほどの懐疑から生み出されたものであり、いまや自らの存在をもって、身の毛のよだつ深淵を、ぽっかりと口を開けている虚無を、永久に遮蔽してしまったのだ、と主張する。ゴッホの絵画との出会いによってLebenとの関連を回復し彼は救われた。その〈色彩〉に関して、信じられないほどの、強烈な碧、…エメラルドをとかしたような緑、オレンジにきわめて近い黄。だが、色の中に、描かれた対象の奥底の生が迸るのでないとしたら、色とはいったい何であろうか。そして、まさにそこには対象の奥に潜むLebenが現前していた。と彼はLebenをもってしか表現しない。手紙の男の発言は、Lebenを言い表すことの困難と限界を示すことで、〈色彩〉の意味合いを暗示している。そしてゴッホの絵画を次のように表現する。「形象と形象とが交互に入り交じり、並びあい、色のうちに形象の奥に潜むLebenがほとぼしり、色と色とが互いに生かしあい、あるときにはひとつの色が不思議に力強くほかの色全てを支えているのが感じられた。」と。

「第5」の手紙は一転、一種の色彩論の様相を呈する。先ず彼は「事物の色彩が、僕を支配する力を発揮する希有な時がある。」と、述べるが、この瞬間の体験は、その文意とは一見逆に、支配するのは色彩ではなく、むしろ自分であり、束の間にせよ、無言の、奥底の秘密を奪い取るのだ、色彩であれ、形姿であれ、碧空と白との対照であれ、ゴッホの絵であれ、それを見る者の内面に反応する激しいLebenの活動が欠けているのなら、「希有の瞬間」など訪れることなど永久にない、と主張する。手紙の書き手は、聖パウロの回心に比するラーマ・クリシュナの碧空を渡る一列の鷲という色彩の奇跡を語るが、碧と白との対照の意味合いは極めて重い。しかし語り手は、クリシュナが受けた啓示が、日常的に結ばれ、慣習によって固定化されているものを解き放し、断片化されているものを本来的に結合すること、それを彼の内部で一瞬のうちに成就する、それ以上この神秘的宗教体験について具体的に語ってはいない。さらに色彩を音楽と対比し、「…色と較べるならば音楽など恐るべき太陽の生の傍らにおかれた弱々しい月の生のようなものだ。」と語るがその色彩の内実を、「色。色。この言葉も今僕にとっては、あまりにも貧しい。」と、無言のうちに愛を求める自然、既に生きられた生にはかならぬ自然、今一度生きられたいと望んでいる自然の、色彩をも超越する類い稀な瞬間ととらえている。

「第5」の手紙を締め括る言葉「そして苦痛も色も僕たちを永遠へと引き入れるものなのなのに、何故色と苦痛とが兄弟でないはずがあるうか。」はホーフマンスタールやリルケの世代と次の世代のトラークルとの接点であり、分岐点ともなっている。何故ならトラークルは『帰国者の手紙』の書き手同様、眼前に迫っているヨーロッパの破局の予感から知覚する全てが没落と崩壊に瀕していて、Abendの光を浴び、Dämmerungの時の様相を示しているのを看取っており、そして、悲しみと苦悩に満ちた彼自身の生もUntergangを辿

る宿命を持っていたからだ。第一次大戦での 27 歳の死の直前 2、3 年の間に、この若者が色彩と形象をもって構築した詩の世界の色が何で Brüder der Schmerzen でないはずがあるうか。

ハイデッガーはトラークルの Bläue について、「碧からなる東は、その東ねられた根底において聖なるものの深さを集めている。その碧の中から、しかしまた同時に碧の持つそれ自体の暗さによって身を隠しつつ、聖なるものは輝き出る。…その暗さの中へ隠されている明るさが、碧なのだ。」と語る。即ち die Bläue とは、Dunkelheit に匿われている輝きであり、blau は dunkel の果てにある、透明な光明であると想像される。ホーフマンスタールの blau の遍在は大空と大気であり、その中に含まれている夕映えの光彩は滴り落ちて、黄金の澱となり、全ての物の上で輝き、燃え上がる。その一瞬、大空と大気に das nackte Blau が顕現するのだ。そのあり方の表現と差異が 1910 年代のトラークルとホーフマンスタールの色に関して感知しえた接点であり、同時に分岐点である。

植和田光晴： このお話を聴いているうちに自分の考えているテーマも一緒に動いている感じなので別の機会にもう一度おうかがいしたいと思っています。

## ヴァイクセルバウムの『Georg Trakl』 について

高橋 喜郎

トラークルの伝記で、最初のもともったものとして、1965年に発刊されたオットー・バージルの『Trakl』がある。この伝記は、HKA の出版される以前のものでありながら、かなり正確かつ詳細なものである。バージルの手法として目立つのは、当時流行していたフロイト主義の影響のためか、伝記上の事実の欠落している所を、作品を深く読み込み、その要素から再構成するという姿勢である。それに対して、ヴァイクセルバウムの態度は、潔癖なまでに実証主義に貫かれている。その実証主義も第一次資料まで辿るといって徹底したものである。事実に基づかないすべての論説に対して、作者は、注においてきっぱりと反駁している。この伝記の中で、作者はひたすらトラークルという詩人に関する伝記上の事実を辿っている。作者は、主張を出来るだけ控えるかわりに、必要な所では、写真で物証を示し、主張に代えている。

恐らく作者の執筆時点までに発見されたすべての資料に当たり、事実として残された事柄が細大漏らさず書かれている事にも、作者の真摯な態度が感じられ、好感が持てる。

HKA の出版された後の 1975 年に発刊されたヘルムート・ Gumtau の『Georg Trakl』は、新しく発見された事実や詩人の遺稿などをちりばめながら、コンパクトかつエッセイ風にトラークルを描出している。Gumtau の伝記は、読み物としての面白さという点では捨て難いが、やはり実証性という点では、ヴァイクセルバウムの伝記に遠くおよばない。

また 1974 年に発刊されたクリスタ・ザースの『Georg Trakl』は、小冊子ながら、ビブリオグラフィーが充実しているだけでなく、重要な伝記上の事実に対する正確な記述が

あり、好感が持てる。

上に挙げた三冊の伝記と比較して、このヴァイクセルバウムの伝記の違いは、次のようにまとめられる。

まず第1に、これはバーゼルのもものと明らかに異なっていると思われるが、実証のための議論を本文の中ではできるだけ避け、その代わりに、必要な個所ごとに資料の写真を掲載している点である。第2に、禁欲的なまでの作者の実証的な態度が挙げられる。トラークルの研究者の多くが、詩人の作品から、詩人と詩人の妹との関係を推論しているが、この伝記の作者は、一切作品からの伝記解釈を否定している。その代わりに、作者は、詩人の妹とブッシュベック宛の手紙によって、彼女とブッシュベックとの関係を示し、それが原因でブッシュベックと詩人の間の長年の友情が途切れたことから、詩人と詩人の妹との尋常ならぬ関係を暗示している。

いずれにせよ、目下の所、この伝記は、最も卓れたもので、恐らくインスブルック版のトラークル全集が出てからも、この伝記を超えるようなものは、なかなか書かれないであろう。すべてのトラークル研究者にとって一読に値するすぐれた伝記と言えるであろう。

- 三枝絃一 : 色々示唆に富んだお話でしたが、余り時間がありませんので二点だけ質問したいのですが。詩人の父がヴィーナーノイシュタットで彼がある結婚の証人を務めたのですが、その当の花嫁（つまり詩人の母）と後に結婚するに至ります。ザルツブルクへ移住した理由の一つにこの事情が絡んでいたわけですか。
- 高橋 : それとあと最初の息子が2歳で死にます。そのこともその理由の一つになります。
- 三枝 : もちろん商売上の理由もありましたか。
- 高橋 : それはあります。
- 三枝 : ブッシュベックと詩人の妹との関係ですが、ファミファタールの妹が強調されている論調は感じられましたか。
- 高橋 : そうですね。妹は一種デモーニッシュなものを持っていました。
- 三枝 : つまりトラークルの気を引くためにブッシュベックに近づいたということですか。
- 高橋 : まあそういう点もあったようですね。

## 2002年度秋季研究発表会 レジュメ・質疑応答

### 『Passion』の暗号

高橋 喜郎

ヴァイクセルバウムは、様々な観点からの考察の末、『Erinnerung an Georg Trakl』の実証性に疑問を持ったためか、その著書の186ページにL. v. フィッカーの付した脚注を見落としに違いない。それはHKAにおける106番の手紙の注で、以下の通りである。

Der Anlaß zur Verzweiflung dieses Briefes darf vielleicht geahnt werden, wenn man die beiden Mitteilungen in Betracht zieht, die Trakl in März 1914 aus Berlin (S. 188 bis 189) an Karl Borromäus Heinrich und an mich gerichtet hat.

この106番の手紙は、ザウアーマンの詳細な論究により、フィッカーの推定した1913年11月末ではなく、1914年4月1日に決定される。それによって、この注の実証的な意義は失われてしまう。しかし、何故フィッカーは、106番の手紙と詩人の妹の流産を知らせる112番、113番の手紙を結び付けたのであろうか。恐らく、フィッカーは詩人から、妹の流産の前に、妹が詩人の子を宿したことを知らされていたのであろう。それは、1913年の末のことだったに違いない。そのため、フィッカーは、1914年4月1日付の手紙に1913年11月末と誤って日付をつけたに違いない。フィッカーのこの誤りが、詩人と妹との間に起こったことを暗示しているように思える。

ザウアーマンは、その論考の中で、1913年の11月2日に詩人がザルツブルクへ帰省した時、詩人が妹と関係し、妹が妊娠したと述べているが、ザウアーマンの見解は、実証的な証拠がないにもかかわらず、正しいと思われる。

1914年の1月に成立した『Passion』の第1稿には、Zwei Wölfe im finsternen Wald / Mischten wir unser Blut in steinerner Umarmungとある。この表現は単に肉体関係を表しているのではなく、その結果としての妊娠をも明示している。ここでwirは、詩人と妹以外には考えられないので、詩人が妹の妊娠に関与したと取るべきであろう。

医学的見地からみると、流産は、妊娠3ヵ月から妊娠6ヵ月の間に起こる確率が高い。詩人の妹の流産した1914年3月から逆算すると、妹の妊娠は、1913年の9月から12月の間ということになる。

トラークル自身が「自伝的素描」と呼んだ『Traum und Umnachtung』には、次のような表現がある。

Aber da er Glühendes sinnend den herbstlichen Fluß hinabging unter kahlen Bäumen hin, erschien in härenem Mantel ihm, ein flammender Dämon, die Schwester. Beim Erwachen erloschen zu ihren Häuptern die Sterne.

末尾の一文の表現は、性行為を終えた翌朝の情景と解釈できる。Sterneは希望の象徴だが、この一文から、全ての希望が潰え去ったことが分かる。季節を表す言葉を見ていくとherbstlich、kahlen Bäumen、härenem Mantelという表現が見られる。これらを総合すると晩秋の光景が浮かんで来る。日本で晩秋と言えば、11月の末だが、緯度の高いオースト

リアでは、11月の初旬頃であろう。しかし、1913年の秋かどうか、これらの詩句からは分からない。ヴァリエントを見ると、Dämon の所が Weib となっている。この言葉は、妹と同格で用いられている。1912年の7月に詩人の妹が結婚した時、彼女は満年齢で十九歳であった。結婚以前の妹を詩人が Weib と呼ぶとは考えにくいので、やはり、1912年以降と取るべきであろう。詩人は、1912年の秋、インスブルックに居たので、詩人が妹と会ったのは、1913年の晩秋以外に考えられない。恐らく、1913年の11月2日に詩人がザルツブルクへ帰った時、詩人と妹の間で性行為が行われ、妹は、身籠もったに違いない。

三枝絃一 : たしかにトラークルの詩を初めて読む人は、それが頭の産物、つまりほとんど想像の産物と思いがちであるが、だんだん読み込んでいくと、多くの点には伝記上の、事実上の核があるわけで、全般的にはではないのですが、この論旨はある程度肯定せざるをえない。トラークルの場合、機微にわたるところは暈して表現するところがあるのでなかなか取り扱いが難しいと思う。それから1913年11月11日ウィーンからフィッカーに宛てた手紙では「私は二日二晩眠りました。もう酷いヴェロナール中毒に陥っています。この絶望のために最近はどうやって生きていっていいかわかりません。」と書いています。その11月末にはやはりフィッカーに宛てて「ああ、なんという審判が私の上に落ちかけたことか。」と書いていますが、これらもそういうことと関係していると考えられますか。

高橋 : 一応その辺のところも考慮した上で多分11月初めにザルツブルクに戻った時に詩人は妹と関係があったのではないか。ですからフィッカーが11月と間違えた一つの原因は11月の他の手紙にもそういうことが出ているからだと思う。現実の問題としては、106番の手紙に関して言えば4月1日の手紙ですね。その辺のところはやっぱりフィッカーが何も知らなかったら、多分いくら彼でも注がつけられなかったのではないか。その意味でフィッカーの付けた注は非常に重いのではないか。全然詩人と妹とのことを知らなかったら、この手紙が妹の妊娠及び流産とは関係あるとは言えないと思う。このところを一番強調したいところです。その部分がなければ詩だけからの解釈になってしまうから非常に状況証拠的な発言になってしまう。フィッカーの注があるのでもう一段実証性の高いものになるのではないのでしょうか。

## トラークルの文学とデカダンス試論

三枝 絃一

トラークル自身の生活を見てもデカダンスの詩人ということが出来る。それはアルコール中毒や麻薬の吸引とその常用による中毒、性的倒錯としての娼婦との関わり合い、妹との近親相姦的關係等によって明らかである。またその想念においても、つまり歴史の終末

期に生きていると思い、世は衰微や没落の状態にあると感じている人もデカダンスと規定されるが、この意味でもトラークルもデカダンス的人間の範疇に入る。もちろんトラークルの文学にはデカダンスモチーフが見られる。デカダンス詩人としては、その生活の点ではヴェルレーヌが典型的であるが、デカダンスを「方法」として文学において、特にその詩において明確に展開しているのはボードレールである。そのデカダンスのモチーフが典型的に見えるボードレールの『悪の華』を比較の対象としてトラークルの文学におけるデカダンスを浮き彫りにする。

トラークルの文学におけるデカダンスモチーフはボードレールのそれと重なり合う部分がある。ボードレールにおいては、それらを恣意的に、すなわち硬直化した市民的美学に対する積極的な対抗軸として展開し、詩において新しい美を結実させた。しかし同時に求められた「人工楽園」は、結局「死」以外それら（酒、麻薬、エロティック、旅等）によっては陶酔は永続せず、再びスプリンに陥った。結果は明らかであって、それらに永続的陶酔を求めたこと自体皮相的と言わざるをえない。

これに対してトラークルの場合は、詩作の出発点の頃、すなわち彼のギムナージウム時代は、ボードレールを始めフランスのデカダンスの詩人（ヴェルレーヌの言うところの *poète maudit*〈呪われた詩人〉）の影響ももちろんあって、やはり恣意的にそれを求めたこともある。事実作品においても、特に『1909年集』の諸詩はボードレールの影響が強く、その模倣またはデカダンスモチーフの一致が見られる。

アルコールはワインが取り上げられ、これを讃え、その酔いによる、まさにデカダンスそのものと言ってよい泥酔状態に身を委ねている個所がある。次に麻薬は肯定的に捉えられている個所と否定的に捉えられている個所がありアンビバレンツと言える。しかし後期においては否定的に見られるようになる。娼婦は一般的には否定的に扱われているが、ソーニャや娼婦であったが後に回心し殉教したアーフラ等は称揚されている。ボードレールにははっきりとは見られない近親相姦の関係は『Blutschuld (血の罪)』や『Passion (受難)』の稿体に暗示的に示されているが、もちろんネガティブに扱われている。

いずれにせよそれらのモチーフに惹かれる官能性は見られるが、ボードレールのように方法的な陶酔を求めてはいない。ボードレールの詩に見られる、内実的にデカダンスに含められうる、現実からの解放あるいは逃避としての旅やエキゾチズムもトラークルの詩に散見するが、それらは儂い希いとして幻覚のように呈示されるだけである。またボードレールは反面では人工的であるが故に讃えた大都市は、トラークルにおいては完全にネガティブに扱われている。ボードレールの最後の拠り所であり、窮極的なデカダンスと言える「死」であるが、トラークルの詩においてはそれは大きく影を投げかけている。それは場合によってネガティブ、ポジティブ双方に捉えられている。しかし前述したように酒や麻薬やエロティック等はボードレールの場合は「人工楽園」実現のための手段であったのに対してトラークルの場合は、そのデカダンス的態度は運命的なものになっていった。

もちろん詩における詩的主体が衰微や没落に繋がる緩やかな下降運動に身を委ね、それを楽しんでいるようなところもある。また衰微や没落に曝された世界、特に大都市がもたらす新奇なもの、醜悪なものに依拠しつつ、ボードレールのように衝撃的なイメージをトラークルなりの表現の仕方で詩に持ち込んだ。しかしボードレールが、それまで「真」と



「善」に結びついていた「美」を前二者の桎梏から解放し、自由で新しい、絢爛たるイメージ世界を創造し展開したのに対し、トラークルの場合は、その美は依然として真と善を引きずっており、またその世界はボードレールのそれに比べて乏しいと言わざるを得ないが一種のリアリティーがある。いずれにせよトラークルの場合、酒、麻薬、エロティーク等は、そこに官能的愉楽を求めたにせよ、「人工楽園」の手段としては考えていない。ましてやボードレールの詩のデカダンスモチーフである反逆やサタニズムはトラークルの詩には無縁であった。またボードレールのデカダンスへの志向の根底に無常観があり、それを逃れるために恒久的なもの（一例として植物でなく鉱物や宝石）を求めたが、この無常観もトラークルの文学には希薄である。これは結局トラークルは無常観に陥る余裕がない限界状況に常に置かれていたからと言える。つまり詩人の陥っていた、その状況とは、そこから抜け出そうにもどうしても出来ない、言わば宿命的な無間地獄であった。したがって原初的なもの、純粹なもの、清浄なもの、あるいは調和的、全一的なもの、節度あるもの、正しきものへの憧れは逆に強くなった。更に『Abendländisches Lied (西欧の歌)』の最終節や『Grodok (グローデク)』の最終三行に見られるようなデカダンスを克服しようとする試行も行われる。その実現はリアリティーを欠くがそういう表現を生み出さざるを得なかった詩人の精神的境位は真実味があり読む者の心を打つ。これに比べるとリルケの生と死を包摂するWeltinnenraumをデカダンスの克服ととるならば、それは壮大で見事な構想であるが、やや虚構的で観念的である感を受ける。

- 両角正司 : Verfall と Untergangはどのような相違があると考えていますか。
- 三枝 : その点については余り突き詰めて考えたことがありません。
- 両角 : ハイデッガーの解釈に従うと、自覚せず日常世界を生きている者たちを verfallen した Geschlecht (種族) と言う。先程あった Wanderer、Fremdling は皆同じもので、これらは Abgeschiedenheit を求めて untergehen して行く。Untergang は決して否定的ではない。これに対して Verfall は全く否定的である。そういう解釈になると思います。
- 三枝 : ハイデッガーの解釈は独特なものであり、必ずしも受け入れられるかどうかは問題ですが、これからそれに関してハイデッガーの論も考慮に入れて考えていきたいと思います。
- 高橋喜郎 : 一般的には Verfall は感覚的で、Untergang は多少観念的ではないでしょうか、語感的に言って。
- 三枝 : Verfall は個別的、Untergang は一般的と言うことも出来るのではないのでしょうか。
- 両角 : Wanderer は、何を言っているのですか。ただ何も目的もなく流離う人ですか。Fremdling とありますが、あれは何でしょう。双方とも同じことを言っているのでしょうか。Ort と言ったとき、それは詩の根源で Ort は槍の穂先を指します。Ort は詩作品(Dichtung)ではなく、詩そのもの、詩精神みたいなものであります。それを Abgeschiedenheit と規定しています。その Abgeschiedenheit を求めて行くのが Fremdling であり、Wanderer であ

ります。そこへ至るのが Untergangではないかと思うのですが。

- 三枝 : ハイデッカーは「解釈」を Erörterung と言ってますね。
- 両角 : 娼婦の話が出てきましたが、年老いた娼婦の手紙か思い出の文章がありましたか。年老いた娼婦の所へ行って性行為をせず、話を聞くだけで帰ってきた、ということですが、それはそういう手紙か文章があってそれに基づいて皆さんが引用していると思います。何の根拠もなしに聖徒伝のように扱っていたわけではないと思います。
- 高橋 : Weininger が娼婦のことを書いていますが、それをよるとトラークルの時代はダブルスタンダードの時代で男性の場合は外で遊ぶことが許されていて、女性はそれが許されていなかった。ヴァイクセルバウムも言っていますが、そのダブルスタンダードに対する一種の反発として皆で娼婦のところへ行って性行為はしないで帰ってくるというデモンストレーションを行っていたということもあったのではないかと。
- 三枝 : 売春制度はブルジョワジーのために作った制度だからそれを逆手にとったわけですね。
- 高橋 : 引用したギムナージウム時代の手紙の箇所ですが、あの arbeiten は、たしかヴァイクセルバウムは dichtenと解釈していますね。あの時期は学業は諦めていて自分は創作をしていくんだ、ということで必死に詩か戯曲を書いていて、その結果としてヴェロナールに頼らざるをえなかったと思うのですが。
- 三枝 : わたしもそれは承知していますが、ちょうどその時期はギムナージウムの再試験の時期と重なっていますから「勉強」ととったわけです。
- 高橋 : ボードレルも近親相姦的面が強いと思う。ただはっきり面には出ていない。例えば「秋の歌」は明らかに恋愛の詩なのですが、母親のいるオンフルールで作っている。いろんな言葉の中に母親との心の綾が入ってきて、ボードレルの場合は父親が早く死に母親と二人きりの時期があり、かなりそういう意味では部分的には近親相姦的なものが、トラークルとは全く別ですが、あるのではないのでしょうか。「秋の歌」はマリー・ドープランに捧げられた詩なのでありますが、ドープランではなく母親のことを歌っている詩です。例えば、エフメール（はかない）とメール（「母親」からきた「清らかな」の意）が韻を踏んでいる。読み方によれば「母親ははかない」になります。つまり母親は再婚することによって自分から離れてしまう。それが生涯ボードレルの心には引っかかっていたのではないかと。ですから広い意味では近親相姦的感情だと思いますが。
- 三枝 : リルケの Weltinnenraumについて論評したことに関してはいかがですか。
- 両角 : Weltinnenraum という言葉は、おそらく手紙の中でたしか 1、2 度しか言っていない。同じ意味のことを別の色々な言い回しでは言っています。もっと大きく捉えていって例えば「オルフェウス」では、そこから始まる世界、こういう世界とは違う世界と言っています。そういうふうに見ていく

と手紙、作品全てひっくり返してリルケの信じていたと思わざるをえない世界があると思うのですけれど。

伊藤卓立 : リルケの基本用語 Weltinnenraumは主体と客体が全体的に統一された世界を意味しますが、この用語には東洋的な要素が含まれているように思えます。たとえば、芭蕉に、「よく見れば薺花咲く垣根かな」、という句がありますが、この「よく見れば」というのは客体に対する主体の対立を意味していない。すなわち、「よく見る」ことによって、芭蕉は自我意識を使用し、己を忘れ、対象を客体として意識せず、むしろ、薺の中に入り込んでいる。この場合、主体と客体、見る芭蕉と見られる薺、das Ich と die Weltは一体化し、主客が合一した世界が現前している。このような立場に日本的な美、芸術、思想、宗教は立っているように思っています。そしてこのような日本の立場に非常に近いのがリルケの Weltinnenraumではなかろうか、と考えています。主観が対象を客観的に見るヨーロッパの二元論的立場では、主観と客観の間の分裂を超越し、対象と一体化することはない。たとえば、花が一本咲いているとすると、その花を四方八方から客観的に分析し、描写しても、それはあくまでも外部から見たものでしかなく花それ自体ではない。それ故カントは「ものそれ自体」(Ding an sich)の認識を断念したのであります。花それ自体になるためには、二元論の原因となっている主観が否定されなくてはならない。主観の否定によって初めて主体と客体が合一することができる世界が成立するが、この世界にリルケの Weltinnenraum は非常に近い。リルケのある詩の中に in dein Verzichten wird er wirklich Baumという言葉があるが、この詩句は自己否定をして初めて人は木それ自体と一体化し、言葉によって木を永遠に形象化することができる、と解釈することができる。人間の自己否定によって「木が本当に木となる」。Weltinnenraum は単なる抽象概念ではなく、詩人が生きて獲得した実感なのである。この立場に立てば、たとえばトラークルにおける形容詞の抽象名詞の多用などは一種の主知主義的な、客観的、抽象概念的表現と言わざるを得ないでしょう。トラークルの詩的世界にはそのような問題性が欠如していた。そのためにはトラークルは死ぬのが早すぎた。あるいは、デカダンスを克服して成熟してゆく時間がなかった。20世紀のヨーロッパの限界を超えてゆくような萌芽もあまり感じられない。リルケと比べるとトラークルの方が作品化された世界は非常に抽象的に感じられる。

両角 : トラークルを感覚的に捉えてみたい。例えば blau はこういう意味でありこれこれは象徴であるというふうにはとりたくない。トラークルの身になってみるとblauは blau と感じたのではないか。もう少し感覚的に捉えてみたい。そうしないと詩が図式化されてしまい詩でなくなってしまう。そのためにはデカダンスの世界があって、それがあからこそそういう色々な色で表現せざるをえない世界があるのではないか。詩とはそういうふう

に世界を感じ取ったところから始まるのではないですか。そうすると例えばそれを全部麻葉で解釈するのは乱暴であり、麻葉から感覚を得たことも分からないこともないけれども、この麻葉を使ったから、この色彩が出たというふうに考えることは図式化であると思う。

- 伊藤 : blauにはトラークルの現実に生きた悩み、祈りみたいのがきつとあるわけです。
- 両角 : blauに限らず色彩を図式化してしまうと詩も何か図式的に作られた世界になってしまう。
- 三枝 : 色彩について色々語られてきましたが、トラークルの詩の場合特に一つの色彩をある意味に限定してしまうと論理の統一性が破綻してしまうことになりかねない。その都度色彩語の意味や働きを文脈の中で捉えていくべきであると思う。
- 高橋 : 文脈によっては象徴的な使い方もされていますが、それを観念的、図式的に、コンピューターのデジタル的に処理してしまうとまずい。やはり常に文脈の中で、それが純粋な意味で普通の青として使われているのか、あるいは heilig なものをシンボライズしているのか見ていかないと分からないのではないか。
- 両角 : 伊藤さんが言われた、リルケを全面的な形で受け取るべきであるということですが、同じような形でトラークルを全面的に受け取ってみるのも一つの方法かもしれない。

## 2002年度活動報告

1. 6月1日(土)午前10時より12時迄春季総会及び研究発表会が草加市文化会館で開催される。

出席者 : 石橋道大、伊藤卓立、植和田光晴、三枝絃一、高橋喜郎、松鶴功記、  
両角正司

- 総会 (1) 2001年度野本会の決算が報告され承認された(別掲)。  
(2) 2002年度の秋季例会は、9月28日(土)に開催の予定となった。  
(3) 2003年度の春季研究発表会に行われる予定のシンポジウム「トラークルの詩における blau(仮題)」の担当者は次のように決定された。

第一期 石橋道大、 第二期 西田英樹、 第三期 伊藤卓立  
第四期 両角正司、 第五期 高橋喜郎、 第六期 三枝絃一

### 研究発表会

両角正司 : 「ホーフマンスタールの色彩と Ort についての試論 —— トラークルの対比のために —— 」

高橋喜郎 : 「ヴァイクセルバウムの『Georg Trakl』について」

トラークル協会2001年度決算報告  
自2001年 4月 1日 至2002年 3月31日

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	126132	会場費（調布市文化会館）	1100
本年度会費	38000	切手代	8730
		2000年度会報印刷代	20000
		会場費（松本ツリストル）	5000
		会場費（草加市文化会館）	730
		本年度支出合計	35560
		次年度へ繰越	128572
		（内、本年度剰余金	2440）
合計	164132	合計	164132

2. 7月27日（土）2002年度第1回幹事会が開催される。

来春例会開催予定のシンポジウムについて次のような変更と決定がなされた。

第4期は範囲がひろいので2分割し、前半を両角正司が、後半を植和田光晴が担当することになった。また仮題であったシンポジウムの正式名は「トラークルの詩におけるblau」に決定した。

3. 9月28日（土）10時から12時迄2002年度秋季総会及び研究発表会が新潟市の新潟会館で開催される。

出席者： 伊藤卓立、三枝紘一、高橋喜郎、両角正司

総会（1）2003年度の春季例会の期日は2003年5月31日（土）を、会場は日本独文学会が開催される武蔵大学の近辺の公共施設を予定。

（2）本会の創設10周年記念事業として今のところ①2003年春季例会のシンポジウムの結果の公表②ヴァイクセルバウムの『Georg Trakl』の翻訳、が提案されているが、更に会員各位に案を募る。

（3）シンポジウムの第4期の後半の担当予定者が都合が悪くなり辞退されたので早急に希望者を募る。

研究発表会

高橋喜郎：「シンポジウムの資料についての論考」

高橋喜郎：「『Passion』の暗号」

三枝絃一：「トラークルの文学とデカダンス試論」

4. 2003年 3月20日（木）第2回トラークル協会幹事会が開催される。

2003 年度春季例会の期日は 5月31日（土）に決定。会場は決定次第早急に会員各位にお知らせする。シンポジウム「トラークルの詩における blau」の第四期後半は、高橋喜郎が担当することになり、また第二期を担当する予定であった西田英樹が病気のため担当出来なくなり、代わって三枝絃一が担当することになった。したがって分担は、第1期 石橋道大、第2期 三枝絃一、第3期 伊藤卓立、第4期前半 両角正司、第4期後半 高橋喜郎、第5期 高橋喜郎、第6期 三枝絃一となる。

5. 2003年 3月31日 2002 年度会報が発行される。

### お知らせ

2003年度秋季総会・研究発表会は、10月18日（土）に仙台ビジネスホテルの会議室で開催予定。

発表予定者、演題：三枝 絃一「ハイデッガーの『Die Sprache im Gedicht Eine Erörterung von Georg Trakls Gedicht』における詩『Sommerneige』の解釈を巡って」

伊藤 卓立「トラークルとユーゲントシュティール」

### 会員消息

住所表示変更

高橋明彦 330-0035 さいたま市北区盆栽町 275-1 ベルシェーナ 405

中村朝子 330-0803 さいたま市大宮区高鼻町 3-61

宮原 朗 338-0811 さいたま市桜区白楸 656-2

---

### 編集後記

発行が大変遅れてしまいました。申し訳ございませんでした。お詫び申し上げます。

さて懸案であったシンポジウムの開催がこの春季例会においてようやく実現の運びとなり、とどこおりなく終わり一応の成果を収めた言えますが、出席者が7名で発表者が5人でほとんど出席者イコール発表者という状態で、シンポジウムの体をなさない感がありました。それどころか、担当予定者が御都合で担当出来なくなったところもありますが、発表者が少なく、二人が重複して発表せざるをえないという苦境を露にしてみました。これはひとえに会員数、特にアクティブな会員の少なさに由来しています。したがって会員の勧誘が緊急問題です。学会機関誌「ドイツ文学」の修士論文一覧表でトラークル関連の論文を書かれた方を勧誘したりしていますし、インターネットでトラークル関連のホームページを検索しトラークルに関心のある方を勧誘し、また本会のホームページも開設も考えていますが、会員各位におかれましてはもとぞ新会員を勧誘して下さいようお願いいたします。（さ）

# トラークル協会会員名簿

(2003. 3. 31. 現在)

石橋	道大
伊藤	卓立
植和田	光晴
鍛冶	哲郎
川添	悦男
児玉	昭人
三枝	紘一
杉岡	幸徳
高橋	明彦
高橋	修
高橋	喜郎
瀧田	夏樹
筑和	正格
中村	朝子
西岡	あかね
西田	英樹
松鶴	功記
三木	正之
南谷	和伸
宮原	朗
両角	正司